

シミュレーション教育による「災害看護」の教育効果と課題について

井上弘子¹⁾*・山本智恵子¹⁾・藤田彩見¹⁾・山本裕子¹⁾・丸山純子¹⁾

真壁五月¹⁾・山下亜矢子¹⁾・木下香織¹⁾・宮武一江¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部看護学科

(2019年11月20日受理)

災害は突然発生し、地域全体の機能を停止させ、災害地域の生活者全てが被災者となる。このことから本学の災害看護の授業構成を2018年度より基礎・成人・精神・母性・小児・老年・在宅・公衆衛生の看護の各領域に関して学修できる授業形態とした。授業方法は思考力育成に効果があると言われているシミュレーション教育を取り入れた。今回、災害看護にシミュレーション教育を取り入れた効果と課題を明らかにすることを目的とし、授業後に学生へアンケート調査を行った。結果、学生は情意領域に留まらず、認知領域、精神運動領域の調和が取れた学びができていた。また、シミュレーションでの演習を行うことで自信が付き、災害発生時には活動したいという意欲や静穏期に行う防災の必要性についても述べられていた。中には、災害発生時に看護職としての役割を果たすことができるのか不安な思いを抱いた学生が存在した。今後の課題として、このような学生の感情に寄り添った上で、安心感や意欲につながる授業方法を再構築する必要性が示唆された。

(キーワード) 災害看護、看護の統合と実践、シミュレーション教育、教育効果と課題

はじめに

近年、わが国のみならず世界でも多くの災害が発生し、多くの命が失われている。物理学者の寺田寅彦は“天災は忘れたころにやってくる”と警告しており、2018年は6月大阪北部地震、7月西日本豪雨、9月北海道胆振東部地震と大きな災害が次々と発生した。また、今後30年以内にマグニチュード8-9クラスの南海トラフ巨大地震が起こる可能性は70%~80%といわれており、実際に巨大地震が発生した場合の死者数は最大で約32万人にもものぼることが予測されている。このことから災害を予測して事前に対策を行う、減災のための防災教育・防災訓練が全国各地で行われている¹⁾。

災害時の看護の歩みとしては、1995年に発生した阪神・淡路大地震がターニングポイントとなっている。阪神・淡路大地震時に看護師は避難所や仮設住宅を回りきめ細かい生活指導を行った。この生活指導が食中毒や感染症の発生を最小限に食い止めることにつながった²⁾。この阪神・淡路大地震での経験を蓄積、体系化し、新たな取り組みへとつなげていくために1998年日本災害看護学会が設立された。

看護基礎教育では、2007年4月の厚生労働省より出された看護基礎教育の充実に向けた指定規則の改定案³⁾において、「災害直後から支援できる看護の基礎的知識について理解すること」という災害看護の内容を含む統合分野の創

設案が提示された。その後、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部改正が行われ、災害看護の内容が含まれる「看護の統合と実践」という統合分野が設定された。この看護の統合と実践は看護学の各領域に共通する内容であり、看護実践力を高める人材育成をねらいとしている⁴⁾。そして災害看護でのねらいとしては、①人的・物資が制限された災害現場で、多くの関係者と連携しながら活動することで、創造的に看護実践を開発していく能力の獲得につながる。②被災者と向きあうことでの援助の人間関係の基盤や人を尊重する姿勢や倫理観を養うことができる⁵⁾と想定されている。

本学では2007年度から災害看護を学修する科目として「看護の統合と実践」の中に「救命救急医療論」を設置している。科目構成は3年の前期に「救命救急法 (BLS・ACLS)」の講義と演習を行い、後期に「災害看護」についての学修としている。2018年度に「災害看護」の授業を「基礎・成人・精神・母性・小児・老年・在宅・公衆衛生のすべて看護の領域を対象とし、対象者の生活や地域の条件に合わせた援助方法を創出している能力が求められる」⁵⁾分野であることを重視した授業内容へ変更した。

学生が災害の状況をイメージできることを重要と考え、学生の生活の場である新見市近郊で地震が発生した事例を考案した。授業の方法としては学生の思考力育成に効果があると言われているシミュレーション教育を取り入れた。

*連絡先：井上弘子 新見公立大学健康科学部看護学科 718-8585 新見市西方1263-2

本研究では学生へ災害看護の授業終了後に実施した質問紙調査により、2018年度に実施した「災害看護」の授業でのシミュレーション教育の効果と課題を明らかにすることを目的とした。本研究は看護基礎教育における災害看護教育の方法開発の改善の一助となるだけでなく、看護基礎教育での災害看護の教育効果が上がることで、災害看護の知識を持った看護職の増加にもつながる可能性があると考えられる。

Ⅰ. 「災害看護」学習にむけての準備

本学における「救命急医療論」の「災害看護」の中の目的・目標は表1の通りである。前年度までは、日本赤十字岡山支部の協力のもと災害サイクルの災害発生直後の災害現場を想定したトリアージ訓練を展開していた。今年度は、各領域において対象者の生活や地域の条件に合わせた援助方法を創出する能力が獲得できることが重要と捉え、科目担当教員2名に各領域の教員が1名ずつ加わり、計9名の教員が授業方法の検討を重ねた(表2)。

表1. 救命医療論の構成

科目名	救命急医療論
目的	救命救急：救命医療及び看護の基礎知識を理解する。 災害看護：災害発生時の社会の適応やしくみ、災害救護活動や医療対応における看護の役割を理解する。
目標 (災害看護)	1. 災害及び災害看護に関する基礎的知識、技術が理解できる。 2. 災害現場、避難所における健康問題と生活支援が理解できる。 3. 災害発生時に固有な危機的疾患に対する治療・処置が理解できる 4. 対象別にみた災害看護の実践が理解できる。

表2. 授業計画についての検討会

回数	日時	決定事項
1回	2018.1	統合領域として災害看護を取り組む意味を共有。 各領域の1~3学年のレディネスの共有
2回	2018.3	講義内容の決定 講義→共有事例でグループワークで各領域特有の看護を考える
3回	2018.5	講義・グループワーク・発表の日程について検討
4回	2018.8	講義・グループワーク・発表の日程について決定
5回	2018.9	事例について検討 大学が所在している地域での地震の発生とし、大学が避難所となることに決定。学生の領域の配置は希望調査とすることを決定。
6回	2018.10	講義内容を提示
7回	2018.11	事前学習を共有 事例の最終決定 学生の希望調査と領域配置
8回	2018.12	最終打ち合わせ スケジュールや疑問点の確認

学生が災害状況をイメージするために、本学がおかれている新見市近郊で地震が発生した事例を考案した(表3)。看護の領域ごとに対象者の発達段階における身体機能や精神的側面、生活状況での看護の特性を共有した上で、災害発生時に看護介入する時期を定めた。そして学生へ希望領域を確認後、5~8人ずつ各領域に配置した(表4)。

表3. 事例

1)共通事例

2019年1月30日(水)午前3時、鳥取県西部を震源とする震度7(マグニチュード7.7)の内陸型地震が発生した。新見市においても震度6強が観測され、大規模な土砂崩れ、家屋の倒壊、建物火災など大きな被害が発生しており、地域住民はパニック状態である。道路も陥没や橋脚の倒壊で交通機能が麻痺状態。また、ガス漏れや停電、水道管破裂などライフラインも断絶状態であり、けが人も多数発生している。次第に人々が協力しあって倒壊家屋から人命救助をするなど活動を始めている。鳥根原発の影響なし。
各地避難所は開設されているが、新見公立大学体育館に大勢の市民が集まっているような状況である。

2)発災~超急性期の概要

- ・ 避難所(本学)利用者は既定の収容人数の数倍。死者・不明者100名程度。
- ・ 通信インフラ状況：ラジオのみ。 衛星電話は大学に設置、通信可能
- ・ 約700人の被災者が大学の避難所に避難している。
- ・ 大学の本館および体育館は避難所として使用可能。他の建物はガラスが割れ、危険も伴うので使用禁止。
- ・ 物資の提供は西方公民館で行われるように準備が進んでいる。
- ・ 傷病者の搬送などは、ヘリコプターで中国自動車道(高速道路)の新見インター入口にて行えるようになりそうである。
- ・ 仮設トイレは、大学の本館前の駐車場(2号館下の壁際)に設置する予定。

表4. 各領域 事例の追加情報

	領域	災害サイクル	事例の展開場所	事例概要
1G	基礎	超急性期	病院前救護所	トリアージ・応急処置などの看護師としての介入
2G	成人	超急性期	中山間地域の病院	発災直後の病棟での看護師の役割
3G	在宅	超急性期	在宅	在宅療養者とその家族への介入
4G	老年	急性期~ 亜急性期	避難所	ADL低下のある夫と妻への介入
5G	精神	亜急性期	避難所	希死念慮のある方への介入
6G	母性	超急性期	避難所	出産後10日の新生児をもつ家族への介入
7G	小児	亜急性期	避難所	10歳・4歳の子どもとその家族への介入
8G	公衆衛生	亜急性期	避難所及び地域	新見市保健師の役割
9G			他県から1週間派遣された保健師の役割	

Ⅱ. 「災害看護」の授業展開

授業展開と日程については表5の通りである。学生への事前学習として、災害の歴史・災害サイクル・支援体制・法律等の基礎的知識についてテキストを用いてまとめる課題を提示した。講義では事前学習した内容を中心に、災害支援の実践をふまえた具体的な内容の講義を行った。講義の時間配分として殆どの学生は2018年の西日本豪雨災害発生時、避難所での生活や限られた物資での生活を経験していたことから、精神的苦痛、こころのケアに多くの時間を割いた。トリアージ法では事例が書かれてあるカードを提示し、学生が一人ずつ事例について一次トリアージを実施した。講義、トリアージに加え包帯法の演習において日本赤十字岡山支部の講師の協力を得た。後日、学生は小テストにて重要事項を確認後、各領域に分かれファシリテーターの教員の指導のもと、災害看護における領域の特性を導き出した。最終日の領域ごとの発表では、被災現場で

トリアージを実践するグループや限られた資源での代用品について実演するグループ、避難所での健康確認の実演などグループなど、シミュレーションを用いた発表ができ、学生全体が知識を共有した。

表 5. 災害看護 講義演習の進め方

日時	授業回数	方法	内容
1/28(月)	1回	講義	災害の歴史、災害の定義、災害における連携、災害に関する制度、支援体制、ボランティア活動
	2回	講義	OSCATTT、こころのケア
	3回	演習	STAT法でのトリアージを体験、トリアージタグの記載
1/29(火)	4,5回	演習	包帯法、固定法
1/30(水)	6,7回	GW	各領域事例に対してのグループワーク
3/4(月)	8~12回	発表	各領域ごとの発表

※OSCATTT：人命救助と初動体制の基本原則

III. 研究方法

1. 調査期間：2009年3月4日～3月11日
2. 調査対象：新見公立大学「救命救急医療論(災害看護)」を履修した看護学科3年生62名
3. 調査方法：留め置きアンケート調査
 - 1) 独自に作成した自記式無記名の調査表を用いた。授業終了時に質問調査用紙を配布。質問調査用紙について十分な説明と同意チェックリスト欄を設け同意を得た。質問調査用紙の投函は函箱を設置し期日を説明した。
 - 2) 調査項目
 - (1) 「災害看護に関する関心度」全く関心がなかったを「0」、かなり関心を持っていた「10」とし、授業前と後それぞれに関心度を示す評点法とした。以下の(2)～(5)については自由記載にて、回答を求めた。
 - (2) 災害時の看護職の役割について考えていること。
 - (3) 新見市で地震が起こったという事例でのグループワークでの学び。
 - (4) 「災害看護」全体の学び・感想。

- (5) 卒業後、自分が看護職として災害時に何ができるか、何をしたいか。

3) 分析方法

- (1) 単純集計、百分率を算出した。
- (2) 自由記載の項目については、小原⁶⁾の災害看護の教育活動を通して開発した内容と方法を参考に、記述内容を「知識、技術、態度、行動、感情、総合」の6つのカテゴリーに分類した。

IV. 倫理的配慮

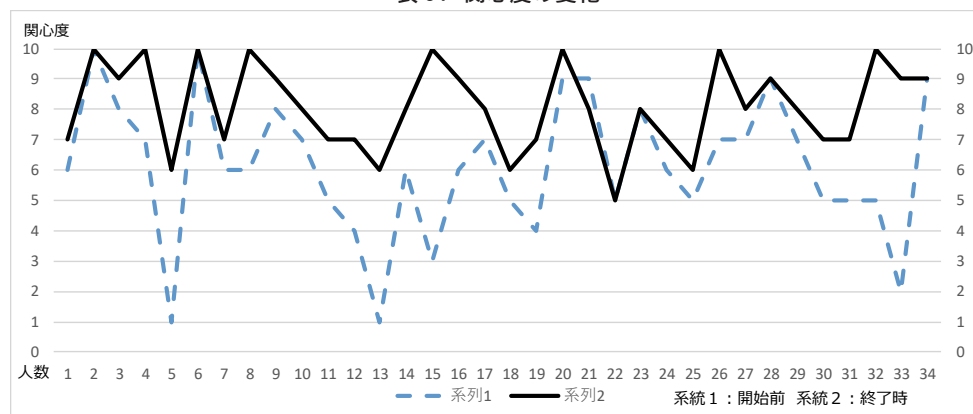
新見公立大学の倫理審査委員会の承認後(2018年度、承認番号170)に実施した。災害看護の授業終了後に調査対象学生62名に対し質問紙を配布した。配布時に本調査の目的および調査内容、方法、倫理的配慮等を記述している文書と内容を口頭にて説明した。なお、研究に参加しない場合でも個人評価および成績評価には一切関係しないことを説明した。質問紙に十分な説明による同意のチェック欄を設け、研究協力の同意が確認できた質問調査用紙のみ分析対象とした。アンケートの回答は、ID番号でデータとして保存した。統計処理後は、アンケート用紙をシュレッダーで破棄し、統計データはロック付きの電子記録媒体(USB)に保存し、大学内の施錠可能な専用ロッカーに厳重に保管した。調査内容は研究成果として学会で発表するが、個人情報情報の公開はしない。本研究を実施するにあたり、研究の結果及びその解釈に影響を及ぼすようなCOIはない。

V. 結果

34名(回収率54.8%)の学生から質問調査用紙の提出があった。提出された調査用紙に同意を示すサインがあることを確認した。

- 1) 「災害看護」に関する関心度(表6)
回答した34名のうち授業前の関心度では、最も低い「1」を2名、「2」を1名が付けてた。授業前から関心度「10」を付けた

表 6. 関心度の変化



学生は2名、「9」は4名であった。授業前の関心度の平均は6.1と比較的授業前から関心度は高かった。授業後では、最も高かった「10」が8名、「9」が6名であった。最低は「5」であり、「5」を1名、「6」を3名の学生が付けていた。授業後の関心度の平均は8.1であった。授業前後の差では、最も大きかった差は2名が+7ポイントであった。差の平均は+1.9であり、授業前から学生の関心度が比較的高かったことから、授業前後の差は微増程度であったが、授業前の関心度9~10の高値を付けていた学生の殆どが、授業後も同じ数値もしくは関心度9を付けた学生が10に上昇していた。しかし、なかには授業開始前「9」、終了時「8」と授業を通して関心度が下降している学生が1名いた。

2) 災害時の看護職の役割について考えていること (表7)

災害時の看護職の役割としては、行動のカテゴリーが41.2%と最も多く、次に技術のカテゴリーが34.7%であった。記述内容では「応急処置・冷静かつすばやい判断、その場にあるものを使ってできるかぎりのことをする」の記

表7. 災害時の看護職の役割について考えていること (n=27)

カテゴリー	記述内容	記録単位数	合計	割合(%)			
知識	他職種の中で大切な役割	1	2	4.4%			
	疾病の予兆の把握	1					
技術	状況に応じた対応	1	16	34.7%			
	応急処置・冷静かつすばやい判断その場にあるものを使ってできるかぎりのことをする	5					
	被災者への身体的処置	1					
	患者の避難や健康管理	2					
	災害によるストレスの把握	1					
	被災者への心のケア	2					
	寄り添った声かけケア	3					
	対象が自立できるようなサポート	1					
	態度	なるべく多くの人に安心を与えること			1	5	10.9%
		被害者の方の安全と安心できることを心がける			1		
一人で抱え込まず協力		1					
主体的な行動		1					
行動	多職種と連携	1	19	41.2%			
	命をまもる	1					
	自分の身を第一に守る	3					
	看護職として活動	2					
	現場の調整	1					
	病院の患者の安全の確保	1					
	自分自身・スタッフ・患者を守る	1					
	患者、ニーズをもった人を把握	1					
	急性期は自分でアセスメント	1					
	冷静にその場の状況を判断	1					
	状況把握し報告	1					
	周りを支え、まとめる	2					
	様々な健康問題に対処	1					
	指揮	2					
感情	訓練をしっかりしておいて、災害が起こったときに適切な行動がとれるようにしておく	1	1	2.2%			
	自分も被災者なので精神的負担が大きい	1					
総合	領域によって複雑	1	3	6.6%			
	入院患者の命をあずかっている責任のある仕事	1					
	やることが多い	1					
合計		46	46	100.0%			

載が多かった。このことから学生は災害時の人材・物資が限られている現場の状況を具体的にイメージできていた。次に「ニーズの把握」「安全の確保」「状況を把握し報告」では、災害時の具体的な行動が示されており、その場での看護職の役割を考えることが出来ていた。また「こころのケア」「自己の身の安全」「多職種連携」という様々な視点での学びもできていた。

3) 新見市で地震が起こったという事例でのグループワークでの学び (表8)

グループワークの学びでは、知識面・総合の2つのカテゴリーで33.3%と最も多かった。知識面において「感染症に気を付ける」「普段と異なるトリアージ」「普段の看護の応用」「発達段階に応じた看護」「視野が広がった」「役割がイメージできた」の記述から、災害現場でのトリアージや避難所での衛生管理については、領域ごとにシミュレーショ

表8. 新見市で地震が起こったという事例でのグループワークでの学び (n=23)

カテゴリー	時期	記述内容	記録単位数	合計	割合(%)
知識	災害時	看護師の様々な役割	2	11	33.3%
		感染症に気を付ける	1		
		超急性期では普段とは異なるトリアージ	1		
		保健師の重要性	1		
		領域ごとに注意する点は少しずつ異なる	2		
		普段の看護の応用	1		
		すべての年代が対象となるため、発達段階に応じた看護	1		
		自助の大切さ	2		
技術	災害時	今ある物資での工夫	1	2	6.1%
		違う物を代用	1		
態度	災害時	多職種・多領域との連携	2	3	9.1%
		情報共有	1		
行動	災害時	他県からの多数の看護師・保健師の支援	1	5	15.2%
		災害発生後経過によるニーズの変化に応じた優先順位を立てた行動	1		
		個々の対象への声かけ	1		
		住民同士等の連携	1		
感情	災害時	静穏期	1	1	3.0%
		普段から1つ1つの仕事をしっかりこなす	1		
総合		実際の現場で自分がどれくらいのことのできるだろうと少し不安	1	11	33.3%
		各領域の災害看護について考えるきっかけになった	1		
		事例を考えるだけでも大変な判断が問われると思った	1		
		自分も働くこと必ず意識しなければいけないこと	1		
		他のグループをきくことで、学びが深まった	3		
		知識がついたし、視野が広がった	1		
		各領域での看護職の具体的な役割がイメージできた	1		
		実際、自分が今住んでいる、生活している地域で被害があったと仮定することで想定しやすかった	1		
		様々な面から考えることができた	1		
		実際に動くときの動き方が分かった	1		
合計			33	33	100.0%

ンを用いた発表をしたことで広い視野での学びを得ることができていた。また「自分が生活している地域での被害があったと仮定することで想定しやすかった」という感想から、本学が避難所となった事例設定から実際の生活と連鎖することができ、必要な看護の抽出につながったことが考えられた。

4) 「災害看護」授業全体の学び・感想 (表9)

授業全体の学び・感想では「総合」が34.7%と最も多くの意見が出されていた。次に行動面が30.8%と多かった。総合では「授業で学んだことを忘れないようにしたい」「学生でもできることはたくさんある」という感想から、災害を身近な存在として捉え、傍観者ではなく自分自身が救援者になれることを実感できたことが考えられた。行動では「平常時からの訓練」「マニュアル作成」という静穏期にできる防災活動の必要性を感じることができていた。

表9. 「災害看護」授業全体の学び・感想 (n=23)

カテゴリー	記述内容	記録 単位数	合計	割合(%)
知識	災害の知識	1	3	11.5%
	災害のサイクルに応じた看護師の役割	1		
	自分の安全が第一	1		
技術	応急処置	1	3	11.5%
	その場にあるものを工夫していく力	1		
	(母乳が出なくなった場合の対応) 乳幼児のミルク	1		
態度	情報共有	2	3	11.5%
	多職種との連携	1		
行動	全体を把握	1	8	30.8%
	平常時からの訓練・連携	2		
	マニュアルの作成が必要	1		
	平常時から備え	4		
総合	授業で学んだことを忘れないようにしたい	1	9	34.7%
	災害時に学生でもできることは沢山ある	2		
	自分が今、何をしたいか、何ができないのか知れた	1		
	災害について考える機会となった	1		
	関心が深まった	1		
	各領域での働き	2		
	看護職が担う役割・責任は大きい	1		
合計		26	26	100%

5) 卒業後、自分が看護職として災害時に何ができるか、何をしたいか (表10)

学生は「授業の感想」の同様に「知識を持つことや・訓練を行うこと」で災害が起こった時の冷静な行動につながると静穏期からできる行動を考えていた。「看護職として自分ができることからやりたい」という意見からは、自己の役

割を把握し、できることを探し、実践することを想定していることが読み取れた。また、DMAT (災害派遣医療チーム) や救急認定看護師という将来目指す専門分野が見つかった学生もいた。

表10. 卒業後、自分が看護職として災害時に何ができるか、何をしたいか (n=18)

カテゴリー	記述内容	記録 単位数
日常	訓練などには積極的に取り組む	1
	冷静に行動できるように知識・訓練を行う	3
	普段から備蓄を行い災害に備える	1
	災害を想定した生活	1
	保健師として働く地域の住民の方を助けられるように日ごろから準備、意識をする	1
	災害時に役立てるような知識をつけたい	1
災害時(看護師・保健師として)	自分でできることはできるだけ自分で行う	1
	避難所の環境整備	1
	患者が不安にならないような声かけ	1
	精神的に支える	1
	冷静に判断	1
	気負いせず、自分ができることをやりたい	1
	先を見越し、リスクを見つける	1
	周りを見た行動	1
	避難所で生活する人の負担が少なくなるような支援	1
	たくさんの人が日常に戻れるように力になりたい	1
	自分の働く病院の災害による害を最小限にできるように、自分にできることをやりたいと思う	1
患者が安全にすごせるための支援	1	
災害に合った時に落ちついた対応を行うためのチームづくり	1	
目標	成人領域の事例の学びを病院で災害発生時に生かしたい	1
	DMATで活躍	1
	救急認定看護師になる	1
合計		24

VI. 考察

授業終了後に提出された質問紙調査から授業前後の関心度、自由記述から抽出した項目から「災害看護」の授業方法にシミュレーション教育を用いた学修の効果と課題について検討する。

1) 「災害看護」の授業方法にシミュレーション教育を用いた学修の効果

「災害看護」のシミュレーション教育の効果として「情意領域に留まらず、認知領域、精神運動領域の調和が取れた学びにつながる」⁷⁾ことが報告されている。今回のアンケートからも看護職の役割についての質問では「被災者へのこころのケア」「寄り添ったケア」という情意領域に加え「アセスメント・その場での判断・報告」「応急処置・冷

静かつすばやい判断、その場にあるものを使ってできるかぎりのことをする」という認知領域や精神・運動領域についての意見が述べられていた。これは、学生はシミュレーションを実施する前段階において、災害現場を十分にイメージできていたことから、災害発生時の必要な看護を具体的に抽出することができていたのではないかと考えた。実践後にはファシリテーターである教員と共にデブリーフィングを行い、自分たちの行動を振り返り、行動を意味づけすることができていた。また、学生間でも話し合いを行うことで改善案が抽出でき、実践レベルに必要な看護を考えることができていた。シミュレーションや演習を導入することは、学習意欲を向上させ、学習効果が得られることから、学生に潜在する「考える力」を行動化まで持っている⁸⁾と言われており、本学の学生もシミュレーションを通して考える力を身につけることができていた。

他領域の災害看護を学修する目的では、他の領域の前でシミュレーションを実践する形式とした。そのため、学生は他の学生から見られているという緊張感を味わいながらの実践となった。実際の災害現場では、人々が現状をつかめずに混乱した状況となる。自分自身も被災を受けながらも支援を行っていく必要がある。このような災害現場で自分の身を守り、かつ経験したことのない支援を行うことは緊張の連続であることが予測される。今回のシミュレーションが実際の災害現場で初めての支援を行う状況で、シミュレーションを想起させることで冷静な行動につながっていくのではないかと考えた。また、「看護職の役割」の質問では「冷静な判断」という意見を述べていることから精神状態をコントロールする必要性を感じていることが窺えた。

成人看護学の術後看護についてシミュレーションを用いた演習を実施した学生は、シミュレーションを用いた演習を行うことが自信につながったと述べている⁸⁾。今回の「災害看護」のシミュレーション教育においても「災害時に学生でもできることは沢山ある」「被災者の方の安全と安心できることを心がける」という感想が述べられている。災害現場での活動はDMATなどの専門的な知識・技術を持った医療者しかできないと感じていた学生が、今回のシミュレーションによって自信が付き、自身が災害発生時に援助者になり活動したいという意欲につながったと考える。

次に「平常時からの備え」「平常時からの訓練」「マニュアルの作成」という静穏期に行う防災の必要性が述べられていた。これは、学生はシミュレーションで実践するための学習の段階時に、災害によって建物の倒壊、停電、洪水が突然訪れるため、人間は混乱してしまう状況を予測できていた。この混乱する状況を予測できたことで、日頃からの訓練、災害時に生活ができる備えという自助、そして病院では入院患者の安全の保障、被災者の受け入れを行うため

のマニュアルの作成という、看護職としての共助の視点から、防災の必要性を導き出すことができた。

2) 「災害看護」の教育的課題

関心度では授業開始前の平均値は「6」(SD:1-10)と比較的高い評価であったことから、学生は「災害看護」を学び、実践したい意欲が前提にあったことが分かった。終了時の関心度の評価としては「8」(SD:5-10)と上昇はしているが「2」程度の軽度上昇に留まった。この背景には、領域ごとにシミュレーションを実施したため、実践した領域は1領域のみに限定され、他の領域の災害看護は発表を見る形式となった。そのため自分が学修した領域については理解できるレベルまで到達することができたが、他領域は同レベルまで到達できないことから、学びが不十分な感覚に陥ったことがと考えられた。実際の災害現場は全ての発達段階にある被災者が、避難所や病院に一斉に訪れる。今回、領域ごとに災害後の様々な災害サイクルの時期についてのシミュレーションは行ったが、急性期の混乱した状況での看護実践についてイメージするまでには至らなかったことが背景にあるのではないかと考えられた

最後にシミュレーションを用いた演習を通して「実際の現場で自分がどれくらいのことのできるだろうと少し不安」「自分も被災者なので精神的負担が大きい」「やることが多い」とネガティブな感想が述べられていた。講師の責務として未知なる力を秘めている若者として彼らを捉えること、彼らのもつ力を引き出し、彼ら自信が授業に参加し興味・関心を育てる授業展開を工夫することが求められている⁹⁾。しかし、被災経験のある学生はシミュレーションを用いての演習が災害時のつらい思いを想起させる危険性もある。教員は学生の感情に配慮することを前提に、シミュレーション教育がネガティブな感覚を引き起こさないよう授業方法の再構築の必要性が示唆された。

VII. 結論

今回、救命救急医療論の中の「災害看護」において、授業形態をこれまでの宿泊研修での災害救護シミュレーション教育から、「災害看護」が統合分野に位置付けられていることに立ち戻り、看護の各領域でのシミュレーション教育を取り入れた学修を行った。この授業内容の成果と課題は以下の項目であった。

- 1) 情意領域に留まらず、認知領域、精神運動領域の調和が取れた学びができていた。
- 2) 自信に繋がり、自身が災害発生時に活動したいという意欲につながっていた。
- 3) 災害発生時には建物の倒壊、停電、洪水が突然訪れる危険性を実感でき、静穏期に行う防災の必要性を導き出すことができていた。
- 4) 災害時に看護職としての役割を果たすことに対して、

不安感や精神的負担を感じている学生が存在した。

シミュレーション教育を行う前段階に、日本赤十字社岡山支部の講師による災害における連携、災害に関する制度、支援体制、OSCATTT、こころのケアという基礎知識を基盤に置いた上で、各領域でのシミュレーションを実施したことが成果につながっていることはいうまでもない。

看護師又は保健師、助産師などの看護職を担う学生が災害時に自助に加え共助や公助を実践できるように、これまでの災害現場での看護職の活動成果などの情報の提供や、援助者の安全性の担保、援助者のこころのケアについて伝えていくことが必要ではないかと考えられる。

謝辞

調査にご協力いただきました学生の皆様に心より感謝申し上げます。

文献

- 1) 酒井明子編：災害看護 看護の専門知識を統合して実践につなげる，南江堂，4-7，2018.
- 2) 南裕子：阪神・淡路大震災 震災後20年 インタビュー 1・17から20年へ，神戸新聞（2019年9月1日アクセス）
<https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/20/rensai/201407/0007161910.shtml>
- 3) 厚生労働省：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書 カリキュラム改定案，看護教育，14，2007.
- 4) 厚生労働省，保健師助産師看護師学校養成所指定規則，（2019年9月1日アクセス）<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001vb6s-att/2r9852000001vbj5.pdf>
- 5) 酒井明子：看護基礎教育に災害看護が組み込まれたことの意味，Nursing BUSINESS，50-53，2007.
- 6) 小原真理子：学士教育における「災害看護」-教育活動を通して開発した内容と方法-，看護教育，47（3），228-232，2006.
- 7) 尾崎道江：看護基礎教育における災害救護シミュレーションの学修効果，茨城キリスト教大学看護学部紀要，2（1），3-10，2010.
- 8) 及川紳代・安藤里恵・遠藤良仁他：成人看護学領域における術後看護のシミュレーション演習の課題の検討，岩手県立大学看護学部紀要，19，17-32，2017.
- 9) 澤田由美・古城幸子等：看護系大学における災害看護教育-宿泊による授業形態を体験した学生の学びから教育方法を検討する-，新見公立大学紀要，36.21-26，2015.